

皮膚科のトリビア

207

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」,そこから転じて「瑣末なこと」となり,今では雑学的知識,豆知識,などを意味する言葉として定着している。

本欄は,小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ,連載しています。ご意見等ございましたら,ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会から 令和3年9月18日

trisomy 8陽性骨髄異形症候群は好中球性皮膚症を合併しやすい

40歳代の男性,2カ月前から発熱が持続。陰茎に難治性潰瘍が出現し,いったん軽快したが再燃。強い疼痛を伴った。生検病理組織は好中球の高度な浸潤で,壊疽性膿皮症を疑った。炎症性腸疾患なし。骨髄穿刺でtrisomy 8陽性骨髄異形症候群(myelodysplastic syndromes:MDS)と判明した。皮膚病変部に浸潤している好中球がtrisomy 8を有していることが証明できた報告例もある。trisomy 8陽性MDSは好中球関連疾患を合併しやすく,腸管Behçet病10例,Behçet病5例,Sweet病3例,壊疽性膿皮症2例の報告がある。

一言コメント

「trisomy 8はFISH法で同定され,MDS,急性骨髄性白血病(acute myeloid leukemia:AML),慢性骨髄性白血病(chronic myeloid leukemia:CML)の急性転化時など,さまざまな病型で認められる常染色体の数的異常である。ただ病型特異性に乏しいことから,病因に直接関わる一次的異常というより,二次的な変化と考えられているとのこと。なんらかの,好中球を活性化させる作用のある物質が,そこには存在するのであろう。」

●第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会から 令和3年9月18日

Paget-Schroetter症候群

40歳代男性。右全体の腫脹が急速に出現。軽度の労作呼吸苦と胸痛があった。超音波と造影CTで右鎖骨下静脈の血栓と肺動脈塞栓を認め,原発性鎖骨下静脈血栓症(Paget-Schroetter症候群)と診断した。利き腕の過外転や過激な運動のほか,外傷,感染,血液凝固亢進,腫瘍による圧迫,静脈炎などが原因と考えられるが不明な場合も多い。若年男性に好発する。治療は発症後10日以内であれば,カテーテル血栓溶解療法およびバルーン拡張術,血栓除去術を行う。慢性期では保存的治療(血栓溶解療法,抗凝固療法,血小板凝集阻止薬の長期服用)が試みられる。片側上肢の腫脹をみた場合にはPaget-Schroetter症候群を鑑別にあげ,胸部X線,造影CTによって肺血栓塞栓症の有無を確認する必要がある。

一言コメント

「胸郭出口症候群の亜型で,治療では第一肋骨の切除が必要な場合もあるらしい。若年,男性,利き腕の片側性腫脹がキーワードである。覚えておこう。」

●第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会から 令和3年9月18日

ペムブロリズマブによる中毒性表皮壊死症

60歳代男性。化学療法後に再発した尿路上皮癌に対しペムブロリズマブを14コース投与したのち,掌

蹠に水疱が出現し、口腔内のびらんと全身の紅斑を生じた。プレドニゾロン50 mgを投与したが症状は進行、中毒性表皮壊死症に移行した。ペムブロリズマブはPD-1阻害薬の1つで、ニボルマブと同様に多くの免疫関連の副作用 (immune-related adverse event : irAE) が生じるが、皮膚障害もirAEの1つで、通常はGrade 1~2の軽症である場合が多いが、頻度は高くないもののStevens-Johnson症候群、中毒性表皮壊死症 (toxic epidermal necrolysis : TEN) の出現も報告されている。

一言コメント

「irAEは覚えておくべき医学用語である。ちなみにイビリムマブではGrover病 (transient acantholytic dermatosis : TAD) や、薬剤性過敏症症候群 (drug-induced hypersensitivity syndrome : DIHS) も報告されているとのこと。」

●第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会から

令和3年9月18日

日本人ではアパルタミドの薬疹がおきやすい

70歳代男性。前立腺癌でアパルタミドの内服を開始して3カ月後に全身の紅斑と四肢の浮腫が出現した。好酸球数3,000/ μ Lと高値。薬剤中止後も3週間にわたって好酸球増多と浮腫は改善せず、プレドニゾロン30 mgの投与で改善した。DLST陽性。米国の集計ではアパルタミド投与開始後、中央値77日で患者の23.4%に皮膚障害が発現。斑状丘疹状皮疹 (33.8%) と乾皮症 (32.4%) が多かったがStevens-Johnson症候群やTENも報告されている。さらに日本人では51.4%と高率に皮疹を認めることが報告されていて、日本人の高齢男性患者では痩せ型が多く、体重当たりの薬剤投与量が多くなることが関与しているのではないかとされている。

一言コメント

「中止後も症状が遷延することも特徴らしく、患者が高齢者のため重症薬疹で治療中に感染症を併発し、死に至る例もある。皮膚科医は注意しなければならない。」

●第85回日本皮膚科学会東部支部学術大会から

令和3年9月19日

ジベルばら色粧糠疹の米国における集積研究

1969~1978年まで、ロチェスター病院で行われたジベルばら色粧糠疹の集積研究の紹介。739人の発生があり、男性340人、女性599人と女性に多い。年間発生頻度は17.2人/1万人。75%以上の患者が10~35歳の間に分布し、発症年齢は10カ月から78歳まで、平均は22.7歳。平均4年半ののち、1.8%で再発。寒期に多く暖期に少ない。1/3の症例に直近の感染症またはアトピーがある。

一言コメント

「以前から感染症なのかどうか疑問に思っている。当院の10年間の集計では、年ごとの流行はなし。季節変動ははっきりしない。典型疹は10歳代と20歳代に多く、女性に多い。ただし高齢者でも典型疹と考えてよい症例も存在し、降圧薬などによるジベル型薬疹や脂漏性皮膚炎との鑑別がむずかしい、という印象。ちなみに季節変動についてはGilbertの原著では暑い季節に多いと記載されている。」

●Pain Management Web Seminarから

令和3年9月29日

国際疼痛学会による痛みの定義

国際疼痛学会は2020年に、痛みとは「実際の組織損傷もしくは組織損傷がおりうる状態に付随する、あるいはそれに似た、感覚かつ情動の不快な体験」と定義した。付記には以下のようなことも述べられている。痛みは常に個人的な経験であり、生物学的、心理的、社会的要因に影響を受ける。痛みと侵害受容は異なる現象で、感覚ニューロンの活動だけから痛みの存在を推測することはできない。個人は人生での経験を通じて、痛みの概念を学ぶ。痛みを経験している人の訴えを重んじよ。

一言コメント

「哲学的、あるいは少なくとも精神科的な概念なので驚いた。薬物療法の限界を感じるような内容である。痛み専門医の治療方針にも関わってくるのではないだろうか。少なくとも私には痛みに対応する力がなさそうだ。」